

## 婚活「宅男」(シーン3-2)

結美は、次の男のところに行こうとした。しかし、「結美さん！」と名前を呼び止められた。誰だろうと思いつつも振り返った。そこにいたのは、年齢は30代後半だろうか、髪がボサボサで眼鏡をかけた小太りの男がいた。よれよれのタートルネックの服を着ている。かばんには、何やら人形？いや、最近流行の初音ミクのフィギュアだ。プロフィールカードを見たときには気にもしなかった男なのだろう。結美は、何だろうと思いつつ、答えた。

結美「はい。何でしょう。」

宅男「あの一。」

結美「はい。」

結美は、相手の男がハッキリしないので、そのまま適当に離れようかなと思った。だが、

宅男「もし良おろしければ、僕とお話しませんかあ

あ。」

いきなり声のトーンが上がリ、結美はビックリした。

結美「えっ、えっと。」

結美は、やばい雰囲気を感じたが、とっさに言葉が出てこなかった。

宅男「ご趣味は？」

結美「あっ。はい。お料理とか好きですけど。」

結美は料理がそこまで好きではないのだが、成多との話が頭に残っていて、パニックになったまま、思いもしないことを答えてしまった。

宅男「美味しい料理がつかれるんですか。嬉しいなあ。」

結美「は、はい。」

大分、落ち着いてきた結美だが、宅男と話すたびに、警戒心が膨れ上がっていく。どうにかして、この場から離れなければと思い始めた。

宅男「いやあ、僕は、アニメが好きで、ローゼンメイデンってアニメ知ってますか？」

結美「えっ。あははっ。知らないかも。」

宅男「あれに出てくる水銀燈が好きで。これ見てくださいよ。」

結美は、興味は無かったが、無下に断るのもやばいような気がして、適当にあいづちをうっていた。

結美「あっ。はは。」

宅男「これも見てください。」

結美「はっ。はあ。」

結美は戸惑っていた。宅男が一方向的に話すのを、あいづちをうちながら、どうしようかと思っていた。

が、宅男の話がいきなり止まる。そして、宅男は一点を見ていた。あれっ、何だろう？と思い、結美もそちらを見た。

そこには、ロリータファッションに身を固めた1人の女がいた。会場に入ったときは見なかったので、遅れてきたのだろう。婚活に場違いな恰好だからか、一際目立っていた。

宅男はその女を見ていたのだが、突然、席を立ち、

その女の方へ走り出した。どうやら、ロリータファッションの女に興味を示したらしい。結美は、宅男が物凄い勢いで走っていくのを見ていた。

結美「な、なんなの？」

結美は、宅男から離れられたのは嬉しかったのだが、自分に興味を無くした男のことと、今まで費やした時間のことで複雑な気持ちになり、そのまましばらくたずんでいた。